
破界の月夜

月光月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破界の月夜

【Nコード】

N9465H

【作者名】

月光月夜

【あらすじ】

破界の力を司る十人の異界者『十死誅』——鮮血の月が満ちる時、破界の時は訪れる。

序章…変格心象（前）

いつからだっただろうか。自分の生きる世界が、他の人と同じでないことに気付いたのは。

幼い頃から、両親は自分に“生き物は互いに殺し合うことでしか生きられない”と、それが皆が生きる日常なのだと言いつづけていた。

物心つく前からの刷り込み、それを俺は疑わずただ信じる。

否、疑うことなど知らない。光へ引き寄せられる蛾のように、その世界を自らの日常世界として生きた。

でも、確かにその通りだった。

毎夜毎夜、俺は殺し合いを日常の一貫として消化する。

ある時は人を、またある時は動物を、得体の知れない化物だって殺した。

どの相手も対峙すれば必ず自分を殺しにきたのだから、自らの生き方が破綻していることなど知る由もない。

そうして、月日はあつという間に流れ気付けば十歳の誕生日を迎えていた。

“君はどうして殺すの？”

その夜、あの人はやって来た。

どうして、と訊かれても俺には“殺らなきゃ生きられないから”と、両親に教えられたままの言葉を口にするしかできない。

その答えにあの人はそう、とだけ悲しそうに言って、羽織っていた

真っ黒なコートを脱いで畳み、その場に置いた。

そして自分が今夜君が殺すべき相手だ、と感情のない声で静かに告白する。

その時の俺には人を殺すことに何の疑いもなかったから、いつも通り愛用のナイフを片手に目の前に立つ相手を殺しにかかる。

———殺し合いは一瞬にして終わった。

あの人は向かって来る俺へ人差し指を向けただけで、触れることなく倒してしまったのだ。

殺し合いに負けた者に待っているのは死。その時の俺からすれば、単に食事でありつけず餓死するくらいにしか感じないわけでそこに感情などない。あるとすれば、自分がなぜ地面に這いつくばっているのか理解できない驚きだけ。

だから訊いた、“誰なの”と。

その質問にあの人は穏やかな優しい笑顔で“殺人鬼”と答え、倒れている俺を抱え起こしそっと抱き寄せた。

その行為は、自分が倒された時よりも遥かに理解できないものだった。

“殺さないと生きられない世界なのに、どうして自分を殺さないのか”と訊けば、それは間違いだとあの人は優しく微笑み俺の頬を撫でる。

その時初めて、自らの世界へ疑いを持った。なぜなら自分を抱き寄せるこの人は、俺を殺してないのに生きているのだから。

“もし君が本当の日常を知りたいなら、わたしと来なさい”

———今にして思えば、その時感じたものこそが俺が持った初めての感情だったのかもしれない。

もう思い出すことも難しい遠い過去の記憶。

その日からあの人の後を付いて行って二年、俺はようやく皆が住む日常というものを知ったのだった。

一章：鮮血の月

「おい、聞ってるのか椿？」
ツバキ

「えっ？」

昼間の屋上、フェンスを背に少しばかり過去の思い出に浸っていると彰アキラの声にハッとさせられた。

隣で空になったコーヒーマットの缶をつまらなげに振りながら、彰はまたかよ、と更につまらなげにため息をつく。

「お前さ、なんか最近ボーッとしてること多いぜ？なんだ、もしや女で悩んでんのか？いやーモテる男はつらいねー、どれにしようかなって選りすぐりできるんだから」

ニヤニヤしながらこのこの、と俺の脇腹を小突くクラスメートの指を鬱陶しくて軽く払いのける。

「断じて違う。それよりお前の方こそ、部活の心配しなくていいのかよ、もうすぐ大会なんだろう？」

その一言に彰はうぐつと押し黙る。

反応は読めていたが、ここまで効果覷面だとは予想外だ。

————工藤クドウ 彰アキラ

こいつとは中学からの腐れ縁で、高校二年になった現在までその関係は続いている。

彰は俺の『日常』の中での最初の友人だ。

我が黒条高校が誇るサッカー部の主将で、その技術は言うまでもな

いので教師・コーチ陣から絶大な信頼を寄せられている。
……まあ、それが最近のこいつの悩みの種の一つであるのだが。

「なあ、大会のことは口にするのは止せ。後十回も言われたら俺、マジで引きこもるからな」

近々、大きな大会があるらしく“大会”というワードを口にすると、彰のテンションは奈落に堕ちるようにながっくりと下がる。

時々、しつこいと感じたらこの切り札を使うと面白いくらいに効く。

「でも篠塚君、最近ホントにブーツとしてるよね。た、体調とか悪いのかな？」

彰の横でこちらを心配そうに見ているのは同じくクラスメートの雨音^{マネ ミツキ}。雨音さんとは昨年と同じクラスということもあって女の子の友達の中でも比較的仲が良いのだ。

綺麗な赤みがかった茶髪を赤いリボンで片結びした髪型は昨年から変わっていない。

「大丈夫、ちょっと寝不足なだけだから」

その思い遣りのある優しさから出る、柔らかな雰囲気はクラスの男子の間ではかなり人気があるが、本人は気付いていないようだ。

「そ、そっか寝不足か……。でも授業中居眠りしないでちゃんと勉強してるんだから偉いよね、篠塚君。工藤君も見習えばいいのね」

大会ワードでどんよりした彰の肩をポンと軽く叩いてからかう雨音

さん。

この冷たい風が吹き抜ける肌寒い屋上で、雨音さんの優しい笑顔は暖かくて見ていると癒される。

「うっせー、そこの完璧男と俺を一緒にするんじゃないねー」

彰は腹いせに雨音さんの額に強烈なデコピンをお見舞いする。

「いたっ！痛いよ、工藤君っ！」

「自業自得だっ、己のKYさを呪うがいい！」

ぎゃーぎゃーといつも通り賑やかな二人。

学校の昼休みは大抵この三人でこんな感じに屋上で過ごす。

雨音さんはよく弁当を作り過ぎるらしく、三つに分けた弁当箱を持ってくるので、俺と彰はありがたくその内の一つを頂いているのだが、なぜか必ず一つは食べずに残してあるのは、彼氏用やら非常食やらと噂される謎の雨音都市伝説の一つらしい。

と、まあこうして二人と過ごす昼休みの屋上は堪らなく心地よくて、これが『日常』なんだと改めて感じる。だから、つい過去を思い出したりしてしまうわけで、ボーッとすることがよくあるのだ。しかし、それは普段の話。

最近は妙に頭痛がする、しかも夜になると必ずだ。ただの頭痛ならいいが頭が割れそうになるほど痛むというのは少々おかしいので、今度医者に診てもらうことにした。

「そういや……椿、お前知ってるか？」

「知ってる……って何を？」

彰から先ほどもまでの穏やかな表情は消え、一転して険しくなる。
彰は手に持っていた空缶を近くのカゴに放り投げ、空缶は重く暗くなった空気の中でがしゃんと大きな音を立てて山積みになった空缶の山の上に落ちた。

「最近のニュースで話題になってるんだが、この辺りで殺人事件が多発してるって話だ。全く……居心地悪いったらねえぜ」

苦々しげに舌打ちして、彰はフェンスを背にその場に腰を下ろす。

「あ、そのニュース知ってるよ。死因は心臓麻痺なのに、なぜか銃弾の跡があったとか」

彰の話に丁寧の説明を付け加える雨音さん。

普段ニュースを見ない俺にとって有り難いのだが、昼休みの屋上でする話ではない。話をまとめると、この近辺——黒条高校周辺の地域で近頃殺人事件が多発しているらしく、同一犯によるものと思われる、未だ犯人は捕まっておらず今も殺人は続いている、ということだ。

「そっか、なら帰り道は気をつけろよ二人とも？特に彰、大会前だからって遅くまで残るんじゃないぞ」

教師みたいで嫌だ、と彰は不機嫌そうに目を細める。

そろそろ昼休みも終わりなので、雨音さんにお弁当の礼を言って立ち上がる。

「おいおい、他人事みたいに言ってるが、お前も例外じゃないんだから気をつけろよ、椿？」

「はいはい、分かってるって」

彰の忠告に気だるげに手を振り、そのまま屋上を後にした。

一階にある次の授業教室へ五階の屋上からひたすら階段を下りていく。

うちの学校の生徒は大変真面目で、昼休み終了十分前には一部の人間を除いて皆教室にて待機しているのだ。

当然その一部の中には俺や彰も含まれるが、雨音さんは次の授業は受ける必要がないらしいので例外。

なので、今や階段を下りているのは俺だけで、自分の足音が独占して響き渡っている。

「……………」

階段を下りて一階の誰もいない廊下を一人歩いていると、どうしても先ほどの話題を思い出してしまう。

犯人は捕まっていない、犯人はそんなに人を殺して何をしようとしているのか、どんな方法で殺しているのか、もしかしたら自分と同じ……………。

そこまで考えて我に返る。

「何をバカな……、俺には関係ない話だ」

ようやく手に入れた平凡な日常。

それなのにわざわざあの日々に戻るようなことをしようなどと、バカな考えも程々にしたい。

連続殺人犯はきつと警察がなんとかしてくれる、だから自分は他の

人達と同じくただ終わるのを待っていればいい。

———それだけなのに何か怒りに似た感情が俺の中で蠢いている。

「あっ……!!」

そんなことを考えていて、目の前に人がいることに気付かず、思いっきり正面衝突してしまった。

「ご、ごめんっ」

ボーッとしていた自分が全面的に悪い。慌てて謝り、相手を見る。

「あ……」

そこにいたのは、宝石の様に赤い瞳をした赤髪の少女だった。

服装もうちの学校の制服ではなく、フリフリのミニスカートにニーソというポイントに目が行ってしま———じゃなくて、ここの生徒ではなさそうだ。

留学生だろうか、瞳と同じ背中辺りまである真っ赤な髪からして日本人ではないだろう。

謝られてようやくこちらに気付いたのか、赤髪の少女はこちらを見ると僅かに首を傾げ、そしてそのまま何事もなかったように、廊下の奥へと消えていった。

しばらく赤髪の少女が去っていった方を呆然と見ていると、自分の体が汗でびっしょりになっていることに気付いた。

「え、なんで……」

季節はまだ春になったばかりだ。

暑くないし、むしろ冬の余韻が抜けず肌寒く感じる中で、なぜこんなに汗だくになっているのだろうと首を傾げる。

しかもどこか嫌な感じの、助かったとホッとしているような。

しかし、理由は分からず終いで、懷からハンカチを取り出し汗を拭く。

そしてようやく昼休みが終わっていることに気付き、後を追ってきた彰と気を取り直して午後の授業の教室へ急いだ。

(2) Interlude

声は虚しく、あるのはただ残骸として残っている血塗られた屍の群。

「ここも違う……か」

血の海に浮かぶ瓦礫の中、澄んだ青色の瞳はその惨景を静かに眺める。

今度こそ、と“当たり”を期待したが、それもまた“はずれ”に終わり、青瞳の少女は僅かに落胆の表情を浮かべた。

この辺り一帯の住人は全て物言わぬ屍という残骸に成り果て、主を失った建物もまた既にその存在意義を失いただ沈黙するだけの廃墟と化す。

死が充滿した空間の中で、青瞳の少女はその美しい瞳と同じ、流れるような青色の脚まである二つに束ね分けられた長髪を靡かせ、その場を後にしようとするりと向きを反転する。

しかし、少女はすぐに周囲の空間の違和感に気付いた。

「なるほど、“はずれ”だったという訳ではないようだ。目的のものとは違いますが、これもまたいずれ“当たり”となるのだから変わりはないでしょう」

クスリ、と嬉しげに呟き青髪の少女は振り向き様に両手に持っていた双銃を放った。

その瞬間、反動によって生じた衝撃波で青髪の少女の周りにあった廃壁は竜巻に喰われるように凄まじい勢いで崩壊する。

そして、放たれた弾丸が貫いたのは、先ほどまでそこに散らばっていた屍の群だった。突然何かに操られるように動き出し、背後から

青髪の少女へ襲いかかった屍の群は、周囲の空気を切り裂き巻き込みながら放たれた青髪の少女の一撃によって粉々に吹き飛ばされる。

「コンヒョウレイゾク魂憑隷属の力……、どうやら“当たり”は近いみたいだ」

青髪の少女は冷静に状況を把握し、またクスリ、と微笑む。

いつの間にか青髪の少女の周りでは残骸として散らばっていた筈の屍の群が不気味に蠢いていた。その数は優に百を超えているだろう。

しかし、その中で青髪の少女は表情一つ変えず――――

「ようやく始まる。破界の時が……」

ただ崩れた廃墟の隙間から見える、空に浮かぶ血のように赤い月を見つめて静かに呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9465h/>

破界の月夜

2010年11月10日02時15分発行